



連・載・コ・ラ・ム

子育てを考える

最終回

迷惑＋世話＝感謝

香川大学生涯学習教育研究センター
センター長 清國 祐二

シリーズ3弾です。初回は「子どもの成長と遊び」について、前回は「親の学び」について書きました。今回は私が幼少期を過ごした故郷への思いと子育てについて考えてみようと思います。

まず「迷惑＋世話＝感謝」という等式を書いてみました。どんな意味なんでしょうか。

人に迷惑をかけずに、人の世話にならずに生きていける社会ってあるのでしょうか。「スーパーに行けば何でも揃うし、コンビニは24時間営業だし、お金さえあれば何不自由なく生きられる世の中だわ。」なんていう「勘違い」ができるほど経済社会は発展しました。しかし、この「勘違い」が私たちからとても大事な「感謝の心」を奪いつつあります。目の前の親切な人や身近な人には感謝できますが、今私たちが暮らせていることに対する「大きな感謝」には思いが及ばなくなっているようです。

こんな話を聞いたことがあります。ある保護者が「私の子どもには

給食で『いただきます』といわせないうで!』と担任に話したそうです。どうやら理由は「給食費を払って食べているのだから、感謝する必要はない」ということのように

です。その家庭では外出に行った際も決して「いただきます」「ごちそうさま」はいわないそうです。笑い話みたいな本当の話です。「いただきます」には複数の由来がありますが、私たちにとっては仏教的な意味合いが大事でしょう。簡潔にいうと「私たちの命を維持するために宇宙にあるさまざまな命をいただきます」というこ



とです。私たち人間は豊かな想像力を授かっていて「目に見えないけれどこの世に存在するたくさんの力によって生かされている」と感じられます。本当に素晴らしい能力ですよね。でも、その授かり物が受け継がれているのかどうかは心もとない気がします。

これまで書いたことは、「子育てをする」あるいは「子どもが成長することと無縁ではありません。もちろん「迷惑＋世話＝感謝」とも。子育ての当事者である保護者は大変ですし、子ども本人も厳しい子ども社会の中でなにかのストレスを抱えながら成長していかなければなりません。だからこそ、いろんな人に迷惑をかけ、いろんな人の世話になり、生きていけばいいのです。甘えられるところは甘えたらいいのです。そこで「大きな感謝の心」さえもっていれば、懐の深い社会はしっかり受けとめてくれます。

私は青年期まで過ごした故郷に大いに迷惑をかけ、世話になりました。今、こうしていられるのも間違いなく故郷あってのことです。

顔の浮かぶ人、そうでない人、環境や自然も。この感謝の気持ちは自然と「恩返し」の気持ちへとつながっていきます。できる恩返しは故郷ではなく香川で行っています。これも「大きな恩返し」だと、故郷は喜んでくれていると信じながら。

清國 祐二 (きよくに ゆうじ)

2002年 転勤で香川大学へ
2003年 栗林プレーパークを開始
2010年 ロンドンのプレーパーク訪問

現在 香川大学生涯学習教育研究センター長
中央教育審議会生涯学習分科会委員
香川県社会教育委員の会 会長 など

